

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）  
セッション討議内容の記録

セッション名： 居住地と行動分析	
日付： 11月3日（月） 13：15～14：45	
司会者名（所属）： 高見淳史（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻）	
討 議 内 容	<p>セッション全体：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・（セッション全体に関わる討議は特になかった）</li> <li>・ No.204 と No.206 に共通する概念である「プリファレンス曲線」の定義や特性、これまでの研究概況について質疑があった。具体的には、分析ゾーンの大きさによる影響、交通ネットワーク形状との関連性、など。</li> </ul>
	<p>（204）下夕村光弘（苫小牧工業高等専門学校）：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ “ 住居等の立地量を動かす前後で、各ゾーンの従業地プリファレンス曲線が固定 ” とする仮定の意味や妥当性に関して議論が交わされた。著者らのこれまでの研究から、プリファレンス曲線は時点間である程度安定的であることが示されているなどの回答があった。</li> <li>・ 交通手段の違いを取り込んだ分析の余地は？ 例え地下鉄開業に伴う変化などの実態分析には既に取り組んでいる。予測や評価への適用は今後の課題。</li> </ul>
	<p>（205）李昂（山梨大学大学院）：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 居住形態選択への競合危険モデルの適用は 1 つの試行である旨の説明があった。</li> <li>・ 世帯属性の変化をモデルにどう組み込んでいるか？ 図 - 1 の時刻 から の間で観測された変化を、時刻 における選択の要因として組み込んでいる。</li> <li>・ 居住形態選択に立地場所の要因が加味されていない点について、住居立地選択モデルなどとのリンクをどうするかが今後の課題との回答があった。</li> </ul>
	<p>（206）間山大輔（室蘭工業大学大学院）：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 最適職住割当問題を “ 通勤トリップパターンを表す居住地プリファレンス曲線が 2 次曲線となる ” との制約条件を付けて解いたもので、それにより既往最適に比べて実際に近い（or 現実的な）結果が導かれていることが説明された。</li> <li>・ モデルの考え方や仮定の妥当性について、上記の制約条件下における最適解を導く規範的モデルとしての位置づけを明確にしたらいとの意見が出された。</li> </ul>